

『就実教育実践研究』第12巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2019年3月31日 発行

保育者養成校学生を対象とした リスクマネジメントに関する意識調査

**Survey of the awareness of the risk management of becoming a
childcare teacher**

伊藤 優・鎌田雅史

保育者養成校学生を対象とした リスクマネジメントに関する意識調査

伊藤優、鎌田雅史（幼児教育学科）

Survey of the awareness of the risk management of becoming a childcare teacher

Yu ITO (Department of Infant Education)

Masafumi KAMADA (Department of Infant Education)

抄録

本研究は、今後の保育者養成校のカリキュラム開発研究の一環として、保育者養成校の学生にリスクマネジメントに関する意識調査を行い、学生が保育現場における子どもの安全確保のため、どのような意識を有しているのか検討することを目的とする。研究方法としては、保育学生を対象とするICTを活用したアンケートを実施し、学生のリスクマネジメントに関する自由記述について、学生が想起した用語の出現頻度及び用語同士のつながりの関連性を検討した。その結果、学生にとって想起しやすいリスクマネジメントには偏りがみられたことが明らかとなった。そのため、今日求められている保育現場の安全性について、子どもと触れ合った経験の少ない学生でもイメージができるような教材開発の必要性が示唆された。

キーワード：リスクマネジメント、保育、保育者養成校学生、意識調査

I. はじめに

保育所や幼稚園における保育者のリスクマネジメントの重要性については、多くの研究者や実践者から指摘されている（例えば、猪熊, 2014; 前田, 2017）。リスクについて、掛札（2012）は、「リスク＝ハザードの深刻さ×そのハザードによって被害が起こる確率」としている。なお、ハザードとは、人の命などに悪影響を与える可能性のある潜在的な危険のことをいう。また、田中（2011）はリスクマネジメントについて、「①リスク要因の特定、②リスクの分析、および評価、③リスクに対する戦略の3つに分けられる」と示している。

平成27年には重大事故が発生した場合の国に対する報告の仕組みの整備^{注1)}が開始され、平成28年には「教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン」が厚生労働省において作成されるなど、事故発生防止に向けて安全管理の重要性が検討されている。一方で、内閣府は平成29年度の保育施設・幼稚園・認定子ども園で

の重大事故件数が880件に上ったことを公表^{注2)}しており、事故防止に向けてさらなる取り組みが急務の課題となっている。

一方で、保育者養成校の学生に関して、子どもと触れ合う機会の不足から、安全管理についてどのように理解しているのかが危惧される。このことは、現職保育者の方が学生よりも高い頻度で保育現場においてヒヤリハット場面を認知できているという伊東・大野木・石川（2017）の報告からも示唆される。保育者として子どもの安全確保は必須事項であることから（田中, 2017）、保育者養成校においても、学生の保育現場におけるリスクマネジメント能力の育成が求められている。しかし、リスクマネジメントに関するカリキュラム開発が求められているにもかかわらず、先行研究において十分な検討がなされていない。そのため、保育者を目指す学生がリスクマネジメントに関してどのような意識を有しているのか検討することが必要となるであろう。

そこで、本研究は、今後の保育者養成校のカリキュラム開発研究の一環として、保育者養成校の学生にリスクマネジメントに関する意識調査を行い、学生が保育現場における子どもの安全確保のため、どのような意識を有しているのか検討することを目的とする。

II. 方法

2018年6月に、保育学生を対象とするICTを活用したアンケートを実施した。なお本調査には、LimeSurvey GmbHが公開しているオープンソースシステム Lime Survey (<https://www.limesurvey.org/>) を活用した。LimeSurveyは、個人サーバーに設置可能な無償の高機能アンケートシステムである。

(1) 実施時期と手続き

保育者養成校であるA短期大学において、在学生199名を対象とした自由記述式アンケート調査を行った。調査は、資格取得に関する専門科目の時間枠において10分程で実施した。

実施手続きは、まず口頭および文書で本研究の概要と研究協力における匿名性、任意性、いつでも協力を取り下げることができ、いかなる場合においても不利益とならない旨、収集したデータは教育研究以外の目的では使用しない旨等について説明を行った。そして、調査協力に同意した場合のみ、協力依頼書に記載されているQRコードをスマートフォン等の携帯端末で読み込み、表示画面内の質問に回答するよう求めた。なお、携帯端末での調査協力に抵抗のある場合には、紙媒体での回答も可能であり、1名の協力者は紙面で回答を希望した。最終的に、182名（1年生87名、2年生93名、不明2名；男性2名、女性178名、不明2名）からの協力が得られ、回収率は91.5%であった。なお、調査時点では、全ての協力者が幼稚園、保育園、施設への本実習は未経験であった。

(2) アンケートの構成

学生のリスクマネジメントに関する意識をたずねる目的で、『幼稚園や保育園において子どもたちから危険を取り除くには、保育者としてどのような工夫ができるでしょうか？箇条書きで、できるだけたくさんアイデアを挙げてください。』という設問について自由記述式の回答を求めた。

なお本アンケートには上記の項目の他、学年、性別等の属性に関する項目および、他の調査で使用するための項目（理想自己、義務的自己に基づく自己調整のスタイル、危険予知感度に関する項目等）が含まれている。

(3) 得られた回答と分析

本研究においては、樋口（2014）が無償配布しているテキストマイニングソフトKH Coder（ver. 3 Alpha.13）を使用した。本調査で得られた自由記述の文章数は368であり、一人当たりの平均回答数は2.02文であった。協力者は、リスクマネジメントに関する意識について網羅的に回答したというよりは、直感的に想起しやすい回答を行ったと推察される。

Ⅲ. 結果

Table1は、学生の自由記述の中で、3回以上出現した名詞、サ変名詞、動詞、副詞、形容詞、形容動詞の出現頻度を示した表である。そのため、Table1で挙げられた用語は、学生がリスクマネジメントについて考える際、想起しやすい用語を示しているといえる。

Table1 品詞ごとの出現頻度

名 詞		サ変名詞		動 詞		副 詞		形容詞	
子ども	104	保育	51	見る	38	常に	22	危ない	24
周り	28	確認	20	遊ぶ	18	少し	7	丸い	6
遊具	25	注意	16	見守る	16	必ず	6	高い	5
場所	18	行動	14	離す	16			広い	4
事前	15	点検	10	伝える	14			柔らかい	3
環境	14	把握	10	置く	13			正しい	3
遊び	14	怪我	8	考える	12			注意深い	3
ルール	13	一緒	7	取り除く	12				
人数	6	観察	6	届く	11				
先生	6	整備	6	配る	11				
全員	6	活動	5	思う	10				
範囲	6	説明	5	教える	9	副詞B		形容動詞	
クッション	5	予測	5	決める	9	しっかり	19	危険	64
道具	5	カバー	4	使う	9	きちんと	11	安全	20
使い方	4	構成	4	作る	6	あらかじめ	4		
視野	4	指導	4	増やす	6	すぐ	4		
段差	4	配置	4	防ぐ	6	あまり	3		
目線	4	判断	4	起こる	5	ちゃんと	3		
マット	3	連携	4	行う	5	できるだけ	3		
状況	3	チェック	3	尖る	5	よく	3		
状態	3	位置	3	落ちる	5				
同士	3	意識	3	言う	4				
遊び方	3	管理	3	出来る	4				
様子	3	使用	3	入る	4				
		排除	3	起きる	3				
		配慮	3	見渡す	3				
		予想	3	見渡せる	3				
				行く	3				
				整える	3				
				付ける	3				
				分かる	3				

次に、Figure1に学生の記述した言葉の関係性を示した共起ネットワークを図示する。Figure1から、学生が素朴にイメージする保育者の安全対策に関する記述に使用された用語が、関連のあるまとまりとして10グループに大別された。各グループにおいて関連ある用語とそのまとまりごとの意味をカテゴリーとして記載し、Table2に示す。

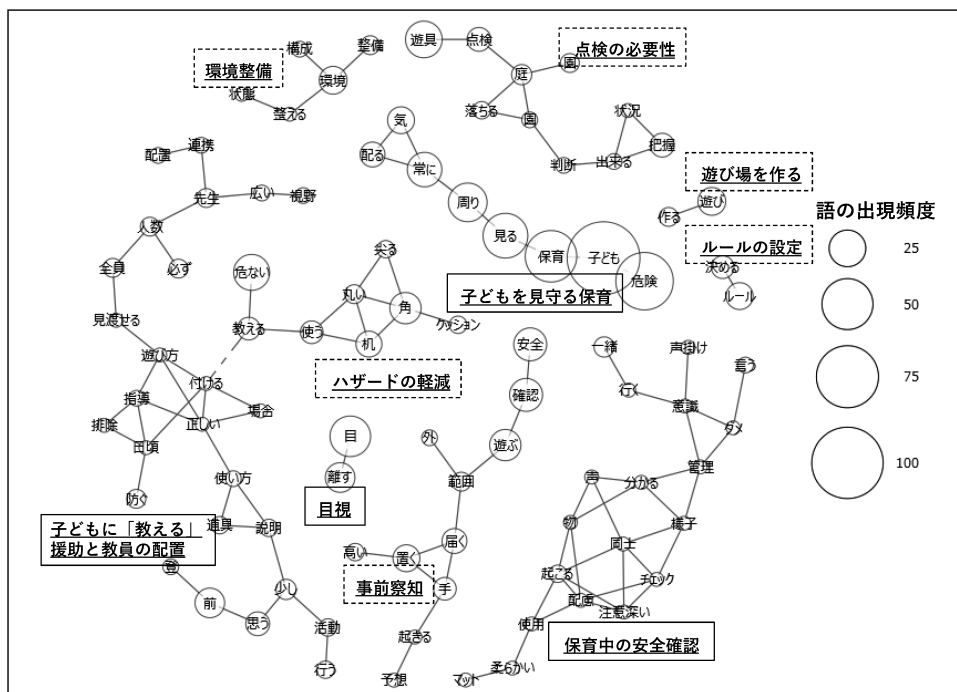


Table2 学生が考える保育施設での安全対策

	NO	カテゴリー	回答例
保育中のリスクマネジメント	1	子どもを「見守る」援助	<ul style="list-style-type: none"> ・常に周りを見る ・一点を見るのではなく周り全体を見る ・保育士が常に気を配る
	2	目視	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもから目を離さない ・他の保育者から見て欲しいと言われた子どもから絶対に目を離さない ・遊具で遊ぶ時は目を離さないようにする
	3	保育中の安全確認	<ul style="list-style-type: none"> ・必要な声掛けをしっかりとすべき ・園庭、保育室に危険物が落ちてないかチェック ・危ない事ダメな事は注意する
	4	子どもに「教える」援助と教員の配置	<ul style="list-style-type: none"> ・正しい遊具の使い方などの指導 ・遊具や道具の使い方の説明をしっかりと ・子どもたち全員を見る事ができる人数の先生を配置させる
事前のリスクマネジメント	5	点検の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・関わる道具、遊具の安全確認・点検を怠らない ・あらかじめ行く所を下見して、危ない所を把握しておく ・危険な場所は子どもたちが登園前に把握し、取り除いておく
	6	ハザードの軽減	<ul style="list-style-type: none"> ・角などにはクッションをつける ・先が尖っているものにはカバーをつける ・机の角や硬い所にはスポンジのようなものを付け、事故を防ぐ
	7	環境整備	<ul style="list-style-type: none"> ・危ない所壊れている所などを事前に環境整備 ・遊具、部屋の中にある角、ドア付近などの環境整備 ・万が一の事を想定して環境構成をしたり、行動したりする
	8	遊び場を作る	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの場には仕切りや枠などを作る ・遊具などで死角をなるべく作らないようにする ・その年齢に合わせたおもちゃや、室内の状態を作る
	9	事前察知	<ul style="list-style-type: none"> ・外で遊ぶ場合は子どもがしっかりと見える範囲で遊ばす ・よく周りを見て安全か安全じゃないか確認する ・あらかじめ危険を予測して対策を講じる
	10	ルールの設定	<ul style="list-style-type: none"> ・ルールをきちんと決める ・危ない行動を想像し、それを防ぐためのルールを作り教える ・ルールを子どもたちと一緒にしっかりと確認する

グループ1～4において、保育中に保育者が行うリスクマネジメントについて学生が想起したものが示された。まず、グループ1において、「子ども」、「危険」、「周り」、「見る」、「配る」などの言葉のつながりが示された。これらの単語から、保育中は常に子ども達に危険が無いかわりをみて気を配るという保育中の保育者の子どもへの支援である【子どもを「見守る」援助】の重要性についての記述であると考えられる。Table1から、【子どもを「見守る」援助】で示された言葉は何度も表出されていたことから、学生が一番想起しやすいリスクマネジメントであったといえる。また、グループ2は「目」と「離す」という言葉のつながりが示された。ここから、子どもたちから目を離さないという【目視】に関するリスクマネジメントを学生が記述したことが示されている。グループ1とグループ2は、どちらも保育中に子どもたちの動きをよく把握し、安全管理に努めることを示しており、実際に子どもと関わる際の保育者の判断能力や対応能力に重点を置いたリスクマネジメントであるといえる。

グループ3は「言う」、「ダメ」、「声掛け」、「チェック」、「意識」などの言葉のつながりから、定期的に危険な場所がないか安全確認をすると同時に、声掛け等で子ども達の安全

意識を高めることの重要性を学生が記述していることを示している。そのため、このグループを【保育中の安全確認】とした。また、グループ4においては「説明」、「指導」、「使い方」という用語が共起したことから、事前に遊具の使い方や遊び方について指導する必要性を学生が想起しているといえる。また、「先生」、「連携」、「配置」、「見渡せる」などの言葉のつながりから、先生の目が行き届くように人を配置することをリスクマネジメントとして学生が記述していると推察される。そのため、このグループは【子どもに「教える」援助と教員の配置】に関するまとまりと捉えられる。グループ3とグループ4は保育中の安全確認や子どもへの声掛けの重要性について示したものであり、保育者だけでなく子ども自身のリスクに対する察知能力の向上や回避手段を持たせるようにするリスクマネジメントといえる。

次に、リスクマネジメントは保育中だけでなく、実際に子どもと関わる時以外でも注意して行う必要がある。グループ5～10には、事前のリスクマネジメントに関して示された。

グループ5の「遊具」、「点検」、「把握」などの言葉のつながりからは、園庭の遊具を点検し、危険な場所を把握し、安全に関する状況判断ができるようにすることを学生が必要だと感じていることが示されているため、このグループを【点検の必要性】とした。また、グループ6としては、「危ない」、「クッション」、「角」などの言葉のつながりから、危険な場所には、事前にクッションなどを用いて危険を軽減することが、学生の中で想起されたといえる。これは、ハザードに関するリスクマネジメントと考えられるため、これらのグループを【ハザードの軽減】とした。さらに、グループ7としては、「環境」や「整備」といった言葉のつながりから、環境を整備し、安全を整えることの重要性、つまり【環境整備】について示していると考えられる。加えて、グループ8は、「遊び」や「作る」といった言葉のつながりから、安全な遊び方を考える【遊び場を作る】についてのリスクマネジメントが示されていた。このような記述から、事前にリスクを取り除くことによって、子どもの安全を担保しようというリスクマネジメントであると考えられる。

一方で、グループ9は「安全」、「確認」、「範囲」などの言葉のつながりから、危険を予想し、手の届く範囲で遊ぶようにする【事前察知】の重要性が表出されていると考えられる。事前に子どもの動きや遊びの様子をシュミレーションし、対策をすることも保育者のリスクマネジメントとしては必要となってくる。最後に、グループ10は、「決める」と「ルール」という言葉から、安全なルールを決めることの重要性である【ルールの設定】を示しているといえる。遊ぶ際のルールを決める際、安全面も考慮したルール作りを事前に示しておくことで、子どもたちの動きをある程度予想しやすいと推察される。

IV. 総合考察

以上の結果から、保育者を目指す学生は、活動中に子どもを見守ったり、子どもに活動を教える際に安全面についても教えたり、事前の環境整備や点検をリスクマネジメントと

して想起しやすいことが示された。以下に、これらの結果を受けて学生のリスクマネジメントに関する意識についての傾向と本研究結果から考えられる今後の保育者養成校でのカリキュラム開発に関わる課題を明示する。

(1) 学生が想起するリスクマネジメントの傾向

①イメージ場面

本研究から、学生は保育所・幼稚園におけるリスクマネジメントを考える際、子ども同士のコミュニケーションを想起できていなかった。しかし、田中（2011）は、保育室での事故の主な原因として、他児の存在を指摘している。幼稚園や保育所は子どもたちが集団で生活をする場である。そのため、子どもたちが遊んだり、生活をしている中で、子どもたちが意図せず友達を押してしまったり、ぶつかったりすることは多々ある。また、子ども同士喧嘩になるとかみついたり、ひっぱったり、ひっかくことによって、相手に傷を与えることも多い。このように、子ども自身がハザードとなるケースについて、学生は想起しにくいことが推察された。

また、学生のハザードのイメージは尖ったもの（「尖る」記述5件）と高低差（「落ちる」記述5件）に集中しており、「引っ掛かる」や「滑る」、「挟まる」、「飲み込む」、「閉じ込められる」、「飛び出す」などについては想起されていなかった。また、「転がる」、「つまづく」など子どもが遊びや生活の中で頻繁に生じるような怪我についても今回は想起されていなかった。そのため、学生は保育環境における多様なハザードの特性を知る必要があるだろう。

②子どもたちの状況

一人ひとりの子どもについて具体的なイメージができていないことも学生の記述の特徴として挙げられる。特に、乳幼児の発達は他の時期と比べても日々の成長・発達が著しい。そのため、年齢によって、子どもたちのできることや注意しなくてはいけないことは異なっており、それに伴い事故の発生要因や状況は異なっている（田中、2006）。しかし、学生の記述からは、年齢に応じた子どもたちの動きを十分にイメージすることができていなかった。さらに、現在保育所や幼稚園には様々な子どもたちが同じ園で保育を受けている。その中には特別な配慮を必要とする子どもやアレルギーを有する子ども、病弱児など様々であり、各子どもたちに合わせた安全管理が必要になってくる。しかし、このような多様な子どもの状況に合わせたリスクマネジメントについては、まだ現場経験のない学生にとって、想起しにくかった事柄と考えられる。

加えて、重大事故に関係が強いアレルギー、窒息、熱中症、また不審者への対策などについての用語が共起されていないことも学生の記述の特徴としてあげられる。学生の記述の中に、アレルギーや熱中症対策などの食事や水分補給について、さらに午睡時のリスクマネジメントについての記述はほとんどみられなかった。また、誤飲や誤嚥、溺水といっ

た特に乳児に起こりやすい事故（掛札，2014）についての記述も見られず、感染症対策に関する殺菌や消毒についても記述した学生は1名のみであった。さらに、門を閉めるなど不審者対策について回答した学生は1名だけで、想起しづらい事柄だと考えられる。

（2）園全体として取り組むリスクマネジメント

本研究結果から、事前の環境整備についてや、活動中の保育者の行動に関しての記述は多くみられた。一方で、事故防止のために、保育者自身の安全管理スキルを高めたり、園全体の安全管理システムを改善することは想起しにくいことが示唆された。

例えば、掛札（2012；2015）が指摘しているように、過去の事例を振り返って分析することによる予防、安全管理能力の向上のための研修等、自己研鑽や情報収集に努めることは、保育者自身の安全管理スキルを高めることにつながるであろう。また、保育者同士の良好な人間関係は保育者同士の連携を強化し、未然に事故を防ぐことにつながるとともに、たとえ事故が起こったとしても迅速な対応ができるであろう。さらに、保育者自身が疲弊していると普段では考えられないようなミスを起こし、子どもたちの安全に直接影響を与えることも考えられる。そのため、園長や主任をはじめとして、風通しのよい園の風土や園環境作りに普段から努めることが必要であろう。

加えて、子どもたちは保育所や幼稚園だけでなく、家庭での生活との連続性の中で活動している。そのため、家庭での子どもの様子について情報収集を行い、保育所や幼稚園での支援に生かすことはもちろんであるが、保育所や幼稚園からも積極的に情報を提示する中で、安全管理について保護者と連携を密に取りながらより良いシステムの構築や安全管理の強化を行う必要があるだろう。

以上のように、学生にとって想起しやすいリスクマネジメントには偏りがみられた。保育者養成校の学生は、保育現場で実際に子どもと触れ合った経験が十分とはいえないため、具体的に理解することが難しく、子どもの危険状況に対してイメージを持ちにくいと推察される。そこで、今日求められている保育現場の安全性について子どもと触れ合った経験の少ない学生でもイメージができるような教材の開発が求められている。

さらに、事故が起こった際の対応スキルを高めたり、事故の潜在的なリスクを減少させる取り組みも必要となってくる。幼稚園・保育所での子どもの生活の中で、保育者が常に子どもの安全に気を配っていても事故は起こりうる。万が一事故が起こった際、二次被害を防ぐよう事故発生後の対応を園として準備し確認しておくことや、起こってしまった事故を最小限にとどめるために保育者が応急処置等のスキルを磨くことも必要である。さらに訴訟リスクを軽減したり、医療的な補償を担保したり地域や家庭との信頼関係を維持していくような学生が意識しづらいクライシス・マネジメントと呼ばれる事故後の対応を含め、カリキュラムを開発する際に検討する必要があるだろう。

本研究の課題として、本調査では学生にリスクマネジメントについて知っている知識を全て記述させたのではなく、思いついたことを記述するように求めた。そのため、学生の

リスクマネジメントに関する知識を網羅しているわけではない。今後リスクマネジメントのカリキュラムを開発するに際しては、学生の知識や技能についても調査する必要があるかもしれない。また、本調査の対象者は約200名であった。そのため、学生の特質に沿ったカリキュラム開発を行うためにも、より人数を増やした調査を行うとともに、実習前後や学年による違いなども検討していくことが求められるだろう。

注

注1) 平成15年に「子ども・子育て支援新制度」開始以降、保育施設に重大事故に関する自治体への報告義務が設けられた。ここでいう重大事故とは、死亡事故や治療に要する期間が30日以上を負傷・疾病を伴う重篤な事故のことである。

(内閣府 HP <http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/outline/pdf/ref1.pdf> 2018.11.15.)

注2) 内閣府「平成29年教育・保育施設等における事故報告集計」より抜粋。平成29年1月1日から平成29年12月31日の期間内に報告のあった事故をとりまとめたもの。

引用文献

樋口耕一 2014『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』ナカニシヤ出版

猪熊弘子 (2014)『「子育て」という政治—少子化なのになぜ待機児童が生まれるのか?—』角川新書, pp.91-110

伊東知之・大野木裕明・石川昭義 (2017)『子どもの事故防止に関するヒヤリハット体験の共有化と教材開発—保育・幼児教育の現職者と実習大学生のキャリア発達から—』福村出版, pp.50-68

掛札逸美 (2012)『乳幼児の事故予防—保育者のためのリスク・マネジメント—』ぎょうせい

掛札逸美 (2014)「保育所におけるリスク・マネジメント ヒヤリハット/傷害/発症事例報告書」兵庫県・公益社団法人兵庫県保育協会

掛札逸美 (2015)『子どもの「命」の守り方—変える! 事故予防と保護者・園内コミュニケーション—』エイデル研究所

前田正子 (2017)『保育園問題—待機児童、保育士不足、建設反対運動—』中公新書, pp.129-168

田中浩二 著 社会福祉法人日本保育協会監修 (2017)『保育現場のリスクマネジメント』中央法規, pp.10-13

田中哲郎 (2006)『保育園における危険予知トレーニング—事故を防ぐリスク感性を磨くための—』日本小児医事出版社, pp.1-7

田中哲郎 (2011)『保育園における事故防止と安全管理』日本小児医事出版社